

報道関係者各位

2022年10月17日

国立成育医療研究センター

未就学時のアレルギー症状と思春期の花粉-食物アレルギー症候群が
関連していることが明らかに
5歳時のアレルギー症状やアレルギー検査結果で
13歳の花粉-食物アレルギー症候群を予測できる可能性

国立成育医療研究センター（所在地：東京都世田谷区大蔵2-10-1、理事長：五十嵐隆）のアレルギーセンター大矢幸弘センター長、安戸裕貴医師、山本貴和子医師らは同施設で2003年から一般の小児を対象として行ってきた出生コホート研究（成育コホート）において、13歳までのデータを使って花粉-食物アレルギー症候群 Pollen-food allergy syndrome (PFAS)¹はアレルギーマーチ²の一つであり、5歳時のアレルギー症状やアレルギー検査結果で13歳の花粉-食物アレルギー症候群を予測できる可能性を報告しました。この論文は、国際雑誌 Nutrients に掲載されました。近年急増している PFAS に対する重要な知見が得られました。

【13歳時の花粉-食物アレルギー症候群 Pollen-food allergy syndrome (PFAS) との関連】

5歳時		調整オッズ比 (95%信頼区間) #
シラカバ (Bet v 1) IgE 抗体陽性		10.6 (2.64-42.5)
スギ (Cri j 1) IgE 抗体陽性		2.74 (1.53-4.91)
ネコ (Fel d 1) IgE 抗体陽性		2.61 (1.31-5.19)
鼻炎		2.26 (1.27-4.00)
喘息症状 (喘鳴) + 湿疹		3.15 (1.41-7.16)
喘息症状 (喘鳴) + 鼻炎		2.57 (1.23-5.35)
鼻炎+シラカバ (Bet v 1) IgE 抗体陽性		9.87 (2.24-43.6)
鼻炎+スギ (Cri j 1) IgE 抗体陽性		3.67 (1.79-7.52)

※多重代入法により調整

【プレスリリースのポイント】

- ・花粉-食物アレルギー症候群 (PFAS) がアレルギーマーチのアレルギー症状と関連していることがわかりました。
- ・5歳時 アトピー性皮膚炎 (+喘鳴、鼻炎などの併存) は、13歳時の花粉-食物アレルギー症候群 (PFAS) との関連が統計学的に有意になりました。
- ・5歳時 Bet v 1 (シラカバ)・Cri j 1 (スギ)・ネコ感作は、13歳時の花粉-食物アレルギー症候群 (PFAS) との関連が統計学的に有意になりました。

¹ 花粉-食物アレルギー症候群 (pollen-food allergy syndrome, PFAS) とは、花粉感作後に、花粉と交差抗原性を有する植物性食物を経口摂取してアレルギー症状を来す病態を指します。PFAS は口腔咽頭症状に限局することが多く、口腔咽頭症状を主徴とすることから、口腔アレルギー症候群 (oral allergy syndrome, OAS) とも呼ばれます。

² アレルギーは、乳幼児期のアトピー性皮膚炎を始まりとし、続いて食物アレルギー、気管支喘息、アレルギー性鼻炎と次々と異なる時期に出現してくることが多く、これを「アレルギーマーチ」と呼びます。

【研究手法】

同センターで出産予定の妊婦（1701人）と、生まれた子ども（1550人）を対象に行っている成育コホート（出生コホート³）のデータを使用・分析しました。2003年から2005年に妊娠した母親を登録し、現在も母親と誕生した子どもを妊娠中から継続的に追跡し、アンケート調査、診察、血液検査により、喘息などのアレルギー性疾患や症状、IgE抗体価などを調査しています。病院を受診した子どもを調査したのではなく、当センターで出産した一般集団の子どもを追跡し、健康状態の推移を調査した縦断的研究（前向きコホート研究）です。過去にさかのぼって情報をあつめて比較する後ろ向きコホート研究や、現時点のみを調べる横断研究よりエビデンス・レベルの高い疫学調査です。

【研究結果・発表者のコメント】

・2021年に当センターは、約10%の13歳時がPFASをもっていることを明らかにしました(Kiguchi et al. PLoS One 2021)。今回、未就学時のアレルギー症状とその後思春期のPFASは関連していることが明らかとなり、昨今増加しているPFASはアレルギーマーチの一つのアレルギー疾患と考えていく必要があります。

・未就学児のシラカバ、スギ、ネコに感作があると将来のPFAS発症リスクを予測できる可能性があります。すでにこれらに感作を認めている子どもについては、将来のPFASの発症を注視していく必要があります。

【発表論文情報】

著者：安戸裕貴、山本貴和子、羊利敏、齋藤麻耶子、佐藤未織、宮地裕美子、島田真美、平井聖子、豊國賢治、石川史、犬塚祐介、樺島重憲、福家辰樹、大矢幸弘

題名：Pollen Food Allergy Syndrome in Allergic March

所属名：国立成育医療研究センターアレルギーセンター

掲載誌：Nutrients

URL：<https://www.mdpi.com/2072-6643/14/13/2658/htm>

【研究費】 成育医療開発研究費

【問い合わせ先】

国立研究開発法人 国立成育医療研究センター

企画戦略局 広報企画室 近藤・村上

電話：03-3416-0181（代表） E-mail:koho@ncchd.go.jp

³ 出生コホート研究：子どもが生まれる前から成長する期間を追跡して調査する疫学手法です。胎児期や小児期の環境因子を含め様々な曝露因子が、子どもの成長と健康にどのように影響しているかを調査します。大人になるまで追跡する場合があります。